

城と城下町の建設・形成過程における水辺空間との関わり合いに関する研究*

Study on Relations with Water Areas in
Construction and Formation Process of Castles and Castle Towns

吉田 充** 新谷洋二***

By Mitsuru YOSHIDA and Yoji NIITANI

要旨：本研究は城と城下町の建設から形成過程において、水辺空間、特に河川との関わり合いを城の立地選定から水害の歴史やその対策の点から研究し、時代の経過とともに変化していく様子を取り扱った。中世後半から近世初頭にかけて治水事業に対する土木技術が発展したことを背景とし、城と水辺空間との関わり合いに関する事例をあげ、河川の近くに立地した結果、時として洪水による氾濫や侵食によって、多大な害を蒙ることとなった課題に対して、どのように解決してきたのかを、複数の城と城下町において研究し、時代背景や地域性などをふまえて検証した。

1. はじめに

わが国では近世初頭に、全国各地で城と城下町が盛んに建設された。特にその頃建設された城下町は現在も主要な都市として活躍している。城と城下町の建設から発展・経営にあたって、水害に悩み、土木技術によって対応してきた様子は、従来河川工学・水文学の中で都市との関係について部分的に見られる。また、都市計画の研究からは、各地の調査報告の中に見られる。

本研究は、城と城下町における水害の歴史や対策を、水辺空間との関わり合いの点から研究して、各事例を時代の経過をふまえて相関的に検証することに意義があると思われる。今回は、城と城下町の建設から形成過程において水害対策に苦勞し、土木技術を駆使することによって、いかにに対処してきたかを明らかにしたい。

2. 研究の方法

本研究に関しては、城郭史・都市史・河川史等を参考にして、城の立地選定に関する歴史的背景と地理的条件を把握する。洪水の被害状況が文献に鮮明に記載されている箇所は参考にし、地形図・絵図面などを時代ごとに比較してみることによって、城と城下町における水辺空間との関わり合いが時代の経過とともに変化していく様子を取り扱った。

3. 水辺空間とのつながり要素

中世後半から近世初めにかけて、天下統一の機運が高まるに従い、諸大名は領土を拡大し、労働力を確保し、土木技術を駆使できるようになってきた。こういった状況の下に、新たに政治・経済上の必要性から、城を要害堅固な山岳地から丘陵や平地に建設し、家臣団および商工業者を城下に住まわせるための城下町建設を全国で盛んに行うに至った。

城の立地選定は水辺空間との関わりに対して以下の事例が重要視されていたと考えられる。

* Keywords 城の立地選定・河川水害・河道変遷

** 正会員 工修 日本大学理工学部土木工学科

*** 正会員 工博 日本大学理工学部土木工学科

(〒101-8308 東京都千代田区神田駿河台1-8)

- 軍事的要害の地 ○河流等による水運
- 都市の衛生保持 ○生活用水としての利用
- 農・工・商業等経済的機能

加えて、易・地相の八卦・四神相応などの易学的要因も深い関わりがあったと思われる。

4. 土木技術の発展¹⁾

近世に入り、徳川幕府においては、関東郡代伊奈備前守忠次が幕領の治水工事を担当し、以来伊奈家(関東流)がこれを世襲した。また8代将軍吉宗が紀伊より井澤弥惣兵衛為永(紀州流)を勘定吟味役に任命し、治水制度を大きく改革した。また各藩においても普請奉行を置き、積極的に土木工事を起こし、学問・技術としても大成し、進歩していった。

わが国の中世における河川工事のほとんどは高水防御工事(洪水被害対策工事)であり、堤防・水防工法・護岸・水制工法など、古くから河川流域を自然のままに放置してあったものを当時の新しい技術によって、対応していった。

また、近世には水運が物資運搬における主な交通手段であったため、低水工事(通船路維持改良工事)や、河口付け替え等が行われていた。

5. 城と水辺空間との関わり合い事例

近世城郭の往事を偲ばせる絵図面などより城と水辺空間とのつながりが欠かせないものであったことが分かる。水辺空間、特に河川の近くに立地した結果、時として洪水による氾濫や浸食によって、多大な被害をうけることとなった。その問題を時代の経過とともに、どのように解決してきたのか、あるいは失敗したのかという事例に着目して典型的な例を挙げる。

- ①築城時に軍事的防御強化のため河川の流路を付け替えた例。
- ②水害対策のため、河川改修・河道付け替えを行った例。
- ③城下町の宅地不足や、領内の農業収益を増やすため、水辺空間を整備・干拓した例。
- ④洪水の被害で、城の形態変化を強いられた例。
- ⑤水害対策に困り、城と城下町を移転せざるを得

なかった例。

- ⑥水害対策に困り、城と城下町をいったん放棄したものの、再び水害対策に挑戦し、改修に成功して、元の居城に戻ることができた例。

これらの事例を考慮して、全国にある城郭の中で水辺空間との関わり合いがあったと思われるものを挙ければ表1の通りである。

表1 城と水辺空間一覧表

城郭名	水辺空間名	立地条件	所在地
弘前城	岩木川・土淵川	台地端	青森
盛岡城	北上川・中津川	合流段丘	岩手
米沢城	堀江川	低地	山形
仙台城	広瀬川	断崖	宮城
宇都宮城	田川	丘陵	栃木
水戸城	那珂川・千波湖	丘陵	茨城
前橋城	利根川	断崖	群馬
川越城	新河岸川	沼地	埼玉
忍城	利根川・荒川	低湿地・沼地	
大多喜城	夷隅川	丘陵	千葉
松本城	女鳥羽川・薄川	平地	長野
上田城	千曲川	断崖	
松代城	千曲川	低湿地	
諏訪高島城	諏訪湖	湖畔	
富山城	神通川・いたち川	デルタ地帯	富山
金沢城	浅野川・犀川	河岸段丘	石川
大垣城	揖斐川	輪中地帯	岐阜
清洲城	五条川	低湿地	愛知
桑名城	木曾三川河口	輪中地帯	三重
福知山城	由良川	河岸段丘	京都
姫路城	市川	丘陵	兵庫
岡山城	旭川	丘陵	岡山
福山城	芦田川河口	平地	広島
広島城	太田川河口	デルタ地帯	
徳島城	助任川・寺島川	丘陵	徳島
松山城	重信川・石出川	丘陵	愛媛
高知城	鏡川・久万川	低湿地	高知
福岡城	大濠・那賀川	デルタ地帯	福岡
熊本城	坪井川・白川	台地	熊本

城の建設から形成過程において、今回は表1のうち地形図・絵図面・文献等で水辺空間と深く関わり合いをみることができた松本・上田・桑名・福知山・福山・広島・松山の事例についてケーススタディとして、各城と城下町について研究し、説明の上、検証整理した。

5-1 松本城²⁾³⁾

松本平は低平地で、奈良井川・田川・女鳥羽川・薄川の合流点であり、その北西で梓川と合流して犀川となる。松本城は女鳥羽川・田川・奈良井川に囲まれた微高地に築かれた城である。城の構成は、本丸を中心に東・南・西に二の丸を配置し、外側に三の丸が取り巻く縄張であった。城域は約600m四方で、内・中・外の三

重の水堀を巡らした。大手門は南正面にあった。東門・北門・北不明門・西門の前には各々水堀と馬出が設けられていた(図1)。

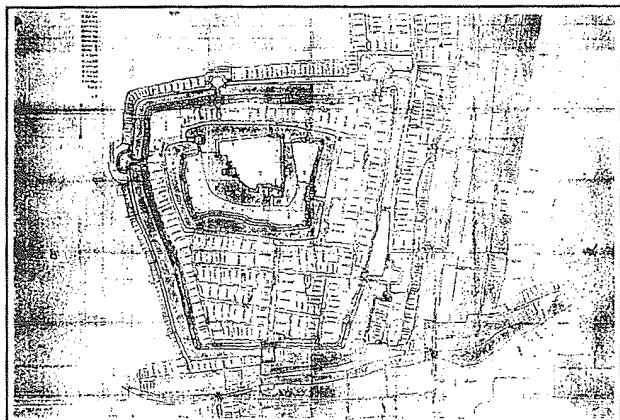


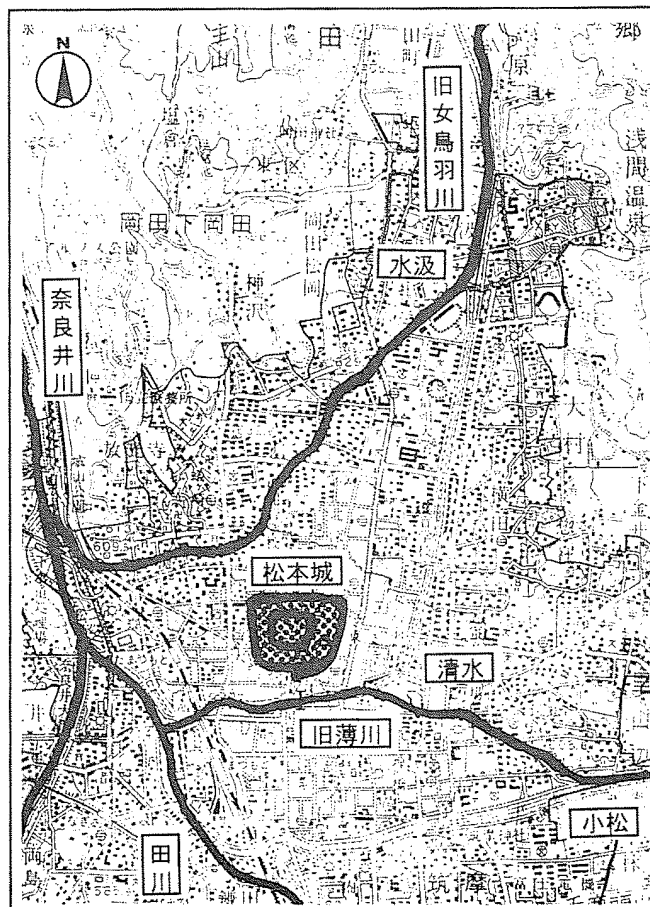
図1 松本城絵図(松本城管理事務所蔵)

女鳥羽川は、幾筋にも河道の変更があり、古代においては現在の位置よりはるかに西方を流れていたようである。明治期までは、その地域一帯の畑地に女鳥羽川の河床の跡と思える、南北に一筋の凹地があった。東は大村・横田付近より、西は蟻ヶ崎高地の下、南は湯川付近まで、今日の女鳥羽川以北の北深志の大部分は、その氾濫地であった。一時は本流が大門沢川と合流

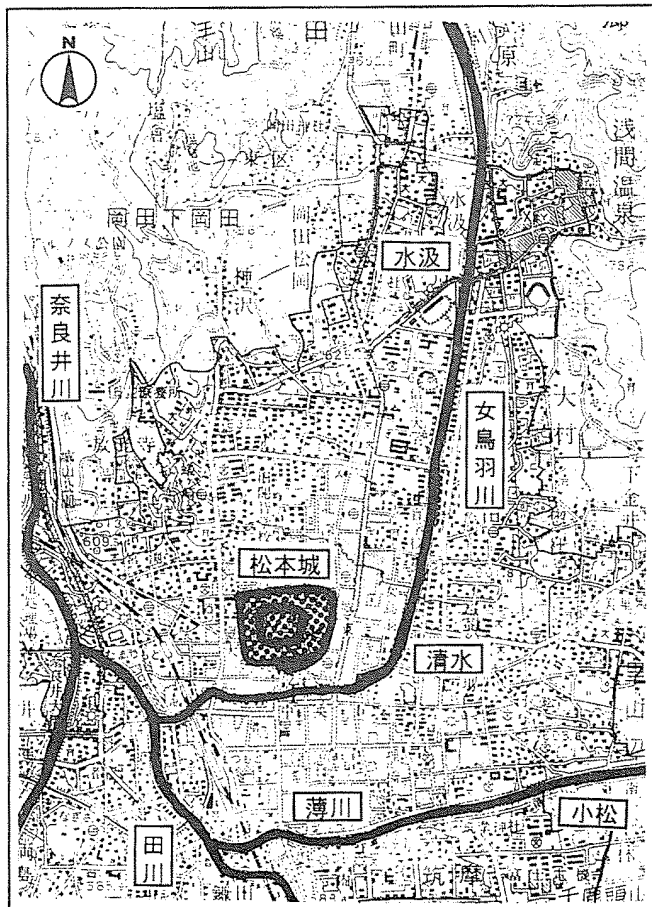
して、城山の南麓を流れ、本村の東を通っていた。現在でも城山の南麓において、緩傾斜の丘陵地が突然急傾斜になるのは、上記の裏付けによるものではなかろうか。

薄川は広い扇状地を有していて、南は中山付近より和泉付近におよび、北は清水方面にいたって、女鳥羽川と合流しており、南深志の市街地一帯はその沖積土より成立している。

松本城は、天正10年(1582)小笠原貞慶により城下の市域を随時拡張された。このとき、女鳥羽川と薄川を防備上の要害とするために、両河川の流路を変更した。この工事の前の女鳥羽川は水汲より城の北側を西流していたのを、水汲より南に流れを変えて、清水において直角に屈曲させ、現在のように西流させた。また、薄川の両方に南小松が、流末には中條も南北両方にあり、水汲には古川筋といえる場所があること、また、前松本警察署(松本市埋橋)の裏辺りを掘削すると古代において河川流路であったと推定できる地層に達することができることなどから、現在の松本市街図に旧河道を上記より推定



(a)中世以前河道推定図



(b)現在の河道

図2 松本推定河道変遷図(国土地理院発行 S=1:50,000に加筆)

したものを示したものが、図2である。これらのことから、両河川の現在の流路は、人工的な掘割の結果といえるのではなかろうか。

松本平は凹型の地形であり、諸河川の集合地点であるため、松本は水害の被害が大きかった。特に、女鳥羽川と薄川は市街地を流れ、松本城の外堀機能を兼ねていたため、両河川が冠水する度に、城下町は被害を蒙った。女鳥羽川は水汲および岡宮辺りにていつも決壊し、西南に向かって押し流れ、薄川は小松または筑摩辺りで決壊し、西北に向かって押し流れた。いずれも市街に殺到してくるということは、旧流路をたって還元する意思があるようにも考えられ、所詮人力を排して土木工事を行ったが、自然の力にはかなわなかったようである。

5-2 上田城⁴⁾⁵⁾

真田昌幸が天正11年(1583)常田の地に築城をしたのは、北に太郎山、南に千曲川の支流に面する尼ヶ淵の大断崖があり、矢出沢川などの河川に囲まれた要害の地であり、加えて舟運の便が得られた。現在の城は領主仙石忠政が寛永3年(1626)に旧上田城の濠・土塁・虎口などを復旧修築したものである。忠政は修築半ばで病死し、工事は藩の財政窮乏のため頓挫し、その後未完のまま明治維新を迎えることとなった。そのせいか本丸、二の丸に藩主邸も藩庁も御殿もない特異な形になっていた(図3)。

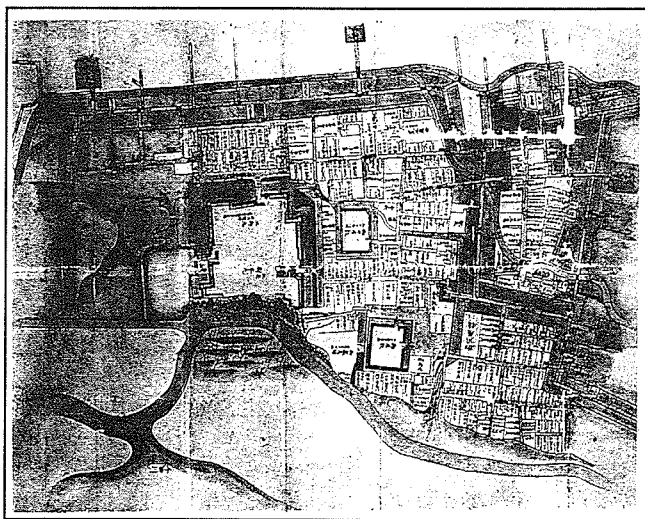


図3 上田城下町絵図(上田市立博物館蔵)

千曲川の第2段丘上に広がる上田城下町は、ほぼ平坦であるが、東方すなわち城下町側が西

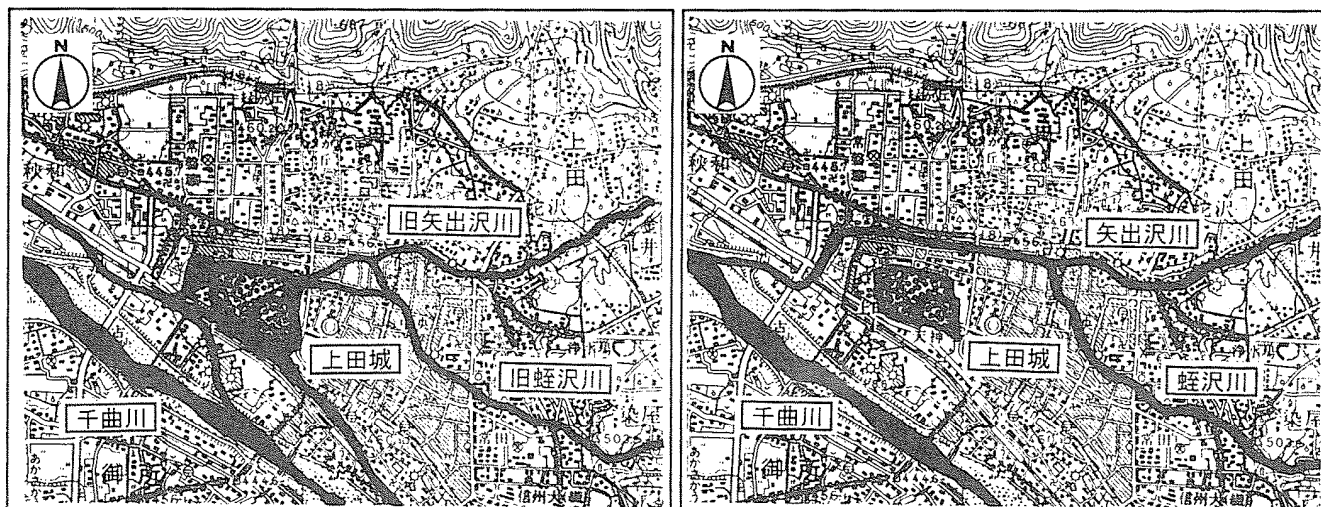
の城郭部分よりやや高くなっている。したがって堀の水も東方より取り入れられているわけであるが、その水源は城より4km東を流れる神川であった。神川から引かれた常田堰が、国分寺・踏入・常田の水田地帯を灌漑するだけでなく、城下町用水として、また堀の水として使われた。また、この常田堰の下流が、神川からの他の諸用水、新屋堰・岩門堰などの末流を合わせて蛭沢川となり、城下町の東部を北西向きに流れて矢出沢川に注いでいた。この蛭沢川は、仙石氏居城時代(1622～1706)までは、矢出沢川への合流点の手前で分けられ、その分流は西へ流れた後、南流して城の二の丸の堀へ注ぐ、という流路も造られていた。

二の丸北のかつての大水濠では、水は東から西へと流れていた。これは上田築城以前の矢出沢川の旧河道を利用したものと考えられている。すなわち、現在の矢出沢川は市街地の北部を西流しているが、築城以前の旧矢出沢川は黄金沢川の合流点より南西に向かって流れ、二の丸の堀の部分を通り、諏訪部の広谷より千曲川へ流れ込んでいたのであった。また、旧蛭沢川は願行寺・伊勢宮辺から海野町の北裏を流れ、相生町を経て、原町裏の大手の堀、中屋敷の北側を流れるという、かつての堀の流路を流れて、やはり消防署北の柳沢病院の前付近で旧矢出沢川と合流していたと考えられている。二の丸北の大堀は合流したこの両河川の浸食によって作られた広い谷を利用して、更に拡大整備したものと見て取れる。旧蛭沢川と二の丸北側の堀は上田市街地の最低地の所で、その悪水払いの水路(中央排水路)として、現在も存続している。

このように矢出沢川と蛭沢川を移動し、その旧河道を拡大したり、土手で仕切ったりして整備し、この二の丸大水濠や旧大手の堀、中屋敷の堀などを造成したのである。

また、北に移した矢出沢川は東から西へとほぼ直線的に流し、諏訪部で流路をほぼ直角に南に変えて、千曲川に落としていた。このように、矢出沢川と蛭沢川を上田城下町の北と西を仕切る外堀としたのであった。

以上から図4に河道変遷を推定する。



(a) 仙石氏(1622年)以前の河道

(b) 現在の河道

図4 上田推定河道変遷図(国土地理院発行 S=1:50,000に加筆)

5-3 桑名城⁹⁾

桑名は東海道五十三次の宿場として栄えた。木曾川・長良川・揖斐川の三川が伊勢湾に注ぐ河口西岸近くに、大河の中に浮かぶように桑名城は築かれていた。桑名が城下町として本格的に形成されたのは慶長6年(1601)、本多忠勝が15万石でこの地に封ぜられたことに始まる。城は一柳直盛が文禄年間(1592～1595)に築いたものを、忠勝は修築拡張した。このとき古い町を取り払って、新しい町割を定め、武士・商工業者を区別した城下町を造った。城の東北部に外郭を構え、南西・西は揖斐川の水を取り入れて堀を造った(図5・正保元(1644)年)。城は扇状をしていたため、一名扇城とも呼ばれた。

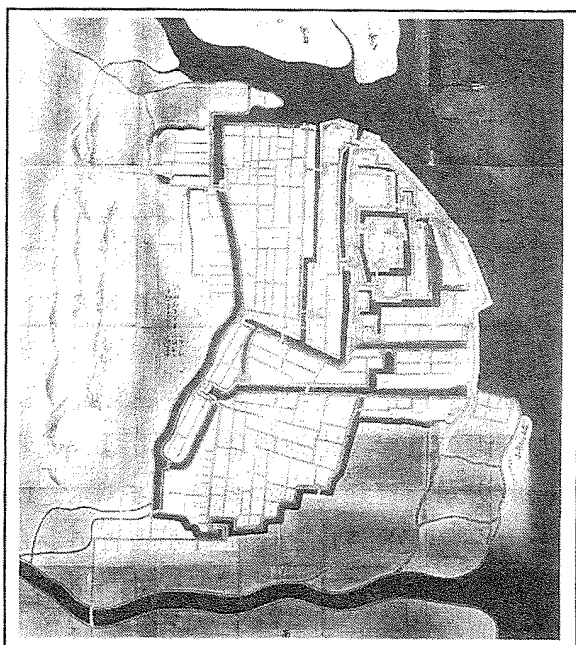


図5 桑名城中之絵図(国立公文書館蔵)

桑名地域一帯は、木曾・長良・揖斐3大河川の下流にあたっていて、その川面が概して高いため、古くからしばしば洪水に悩まされてきた。また、町屋川・大山田川など諸河川の氾濫とともにその治水工事に幾多の苦難をなめてきた。

桑名およびその周辺は非常に低湿で、江戸時代に新田として開拓されたものが多い。桑名の北部には承応年間(1652～1654)に松平定綱・定重の2代にわたって開拓された上之輪新田があり、約400石の収穫があった。しかしこの新田は安政元年(1854)に震災で悪田化し、明治になってから改修工事が行われた。

また桑名城南部の地も大部分が新田開発で、慶安年間(1648～1651)松平定綱の時に開拓された。城南地区は江戸時代に一度開拓されたが、安政4年(1857)の大津波で堤防・耕地が流され、荒れ地のまま放置されていた。

5-4 福知山城⁷⁾⁸⁾

この地への築城の始まりは、小笠原長清の後裔小笠原(塩見)頼勝が、搔上の城を横山に築いた「横山城」であった。後に明智光秀が、この城を改修して、今日の福知山城の基となった。慶長5年(1600)の関ヶ原の役の後、有馬豊氏が入城し、福知山城をさらに改修して、天守を築き、城下町の整備にも力を注いだ。

城主はその後、岡部長盛・稲葉紀通へと代わり、慶安2年(1649)、松平忠房が入封し、9年の歳月をかけて、領地各地の調査を実施、「松平検知」を仕上げた。忠房は20年後に島原に移

り、その後明治に至るまで、朽木13代が城主として福知山を統治し続けた。

由良川は京都・滋賀・福井の3つの府県境の三国ヶ岳(955m)に源を発して、その流域面積は1,880km²と広いが、山地89%・平地がわずかに11%という丹波山地の山峽を蛇行して、日本海側の由良浜に抜けている。この由良川は生活物資の補給路として、また文化の伝播路ともなった。

この地方の中世から近世にかけての地元資料は極めて乏しく、特に災害については、皆無に近い状態である。中世から近世に至る政治的混乱、支配者の相次ぐ交替、それに洪水・火災による流失と焼失なども考えられ、史料らしいものが残っているのは、慶安2年(1649)から寛文9年(1669)までの城主であった松平忠房からである。この松平忠房時代から慶応4年(1868)までの約220年間に、由良川流域のこの地方では、寛文12年以降の記録⁷⁾⁸⁾によると、106回の記載がある(図6)。

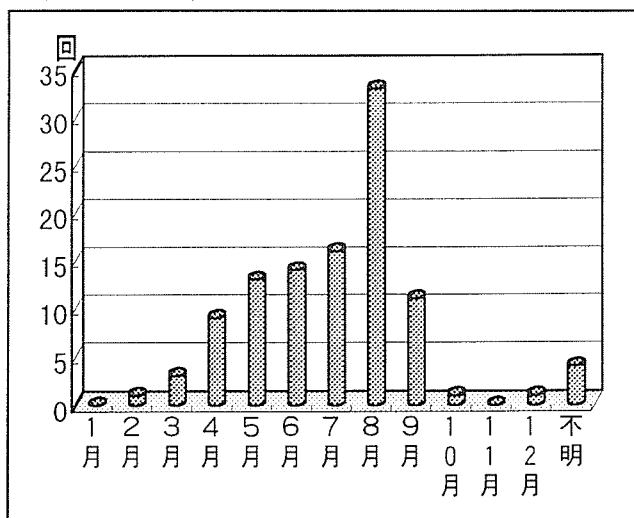


図6 福知山水害発生分布図

旧暦の8月が33回と圧倒的に多く、6・7・8月で計63回と全体の半数以上を占め、台風と梅雨という雨期に多かったことが、記録によっても確認できる。

5-5 福山城⁹⁾¹⁰⁾

福山城は古図面で見ると芦田川の三角州全体を城郭地域とし、要の位置にある常興寺山に城を、その周囲に城下町を配置した平山城である。山の背後には川につながる蓮池を設け、外堀の一部を福山湾の入り江に結び、高台を内堀で囲

んだ縄張の城が築かれていた。

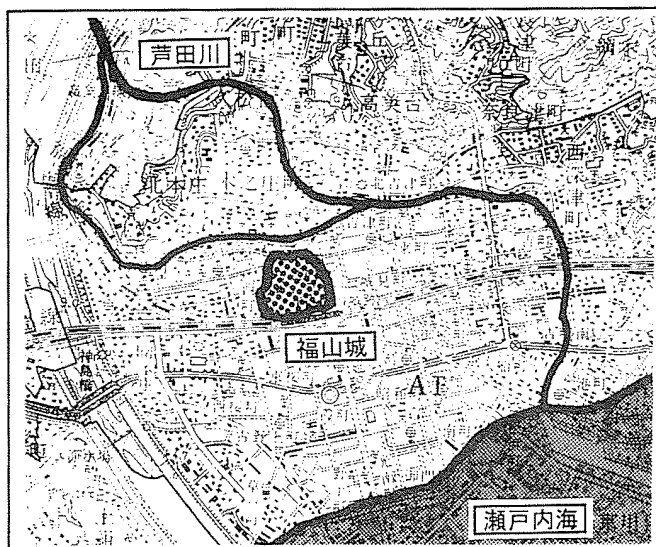
芦田川(流域面積326km²・流路延長180km)の水がその河口に土砂を運んで広大な沖積平野を形成する平野部に福山は存在する。芦田川の流水は、その源を中国山地の谷に発して、瀬戸内海へ向かって南下し、世羅盆地を形成している。

福島正則の領国であった時代(1600～1619)の福山地方は、いくつかの支城があったとはいえ、現在の中心部にあたる地域は、平原であったようである。その後この地を水野勝成が城地として選定した経緯は、当時は物資の運搬は大坂回送であったため、瀬戸内海の航路は決定的な重要性をもっており、新城地は陸海共に交通の要衝であることが求められたからであった。

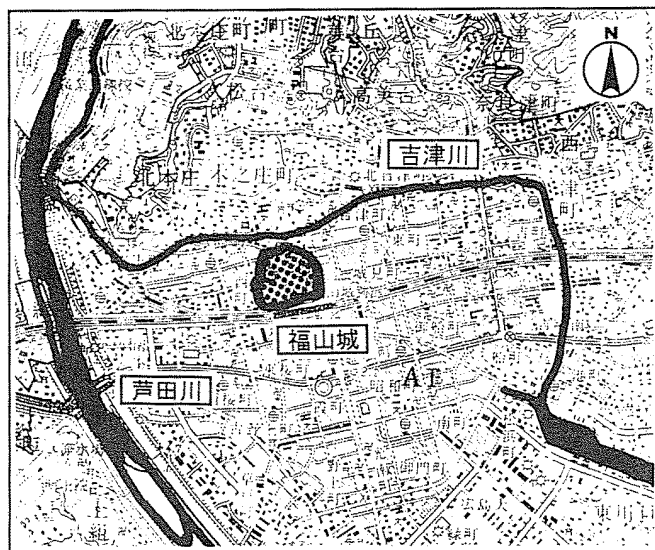
また、城を常興寺山に立地したことの意味は大きく、山陽道に近く、しかも街道筋からは外れており、芦田川筋を押さえた要衝の地で、北には丘陵を背にして平野を控え、南は近く内海に臨み、瀬戸内海の航路の外港としての利用は便利であるし、備後の中心地として領国を運営していく上で、最適地であったといえよう。

福山築城にあたり、城郭と共に干潟の干拓という大工事を並行して進めなければならなかった。城下町づくりは、その下地の土地づくりから始まっている。まず、河口付近がデルタ地帯であったため、芦田川を制御する必要性があった。元和6年(1620)5月に芦田川が氾濫し、城の石垣すら崩れるという被害が出た。そこで城を構築している常興寺山と、両社八幡のある永徳寺山の間を切り抜いて、ここに吉津川を通し、芦田川の本流を本城長の鼻からこの掘り抜きを通して海に流し、城下町とする山の南側の干拓地を氾濫の被害から防ごうとした(図7)。現在のドンドン池がその名残である。元和6年の洪水により、護岸を堅固にして、芦田川と吉津川に挟まれた三角州の上に町割りを行った。

なお福山の海岸干拓進行については、元和5年(1619)の知行目録には、まだ三吉・木之端・手城・川口・多治米などの諸村が表れていないので、蒨山の辺りまでは海が入っており、野上村辺りが海岸に面して、簗島も遠く離れ小島であった。



(a)近世初期(1600~1620)頃



(b)現在の河道

図7 福山推定海岸線・河道変遷図(国土地理院発行 S=1:50,000に加筆)

福山藩においては、18世紀以降水害や干ばつの危機に見舞われていた。『安那郡湯田村風土記』には、「十年に六、七年の割合で、水患を、三、四の割合で干ばつを患った。」と記されていたのも、水害と干ばつの繰り返し襲来する状況を記載したものだった。水害対策は藩を挙げて真剣に検討せざるを得ない状況であったため、特に藩が力を注いだのは、デルタの福山城を分流する芦田川河口の治水事業であった。その対策は、年1回藩の出費で、「十五間口」と称する町の悪水溝の大堀さらえが厳しく実施されていた。

5-6 広島城^{(11)・(15)}

広島城は中国山脈に源を発して瀬戸内海の広島湾に注ぐ太田川の三角州の要に位置する五箇庄に造られた平城で、水城の機能もあった。大きく2つに分かれた太田川とその支流をそのまま堀に利用し、さらに、堀・河川を穿って造成した広大な土地に壮大かつ整然たる城郭・城下町が形成され、惣構は約50haにおよぶ地域を占めていた。

本丸はおおむね中央にあり、二の丸・三の丸と合わせて約14haの広さであった。本丸を取り巻く内堀は南側で拡がり、その中に浮かぶ二の丸は馬出曲輪で、本丸大手虎口の中御門に結ばれ、また三の丸にも橋門と呼ばれた橋でつながっていた。本丸はこのほか東側の裏門から橋で

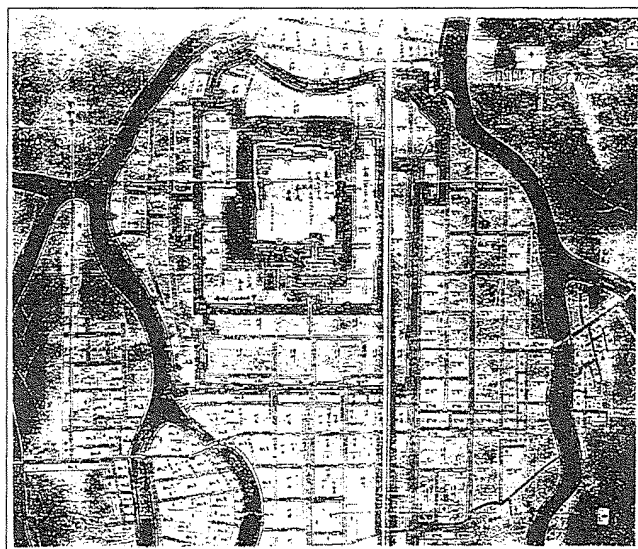


図8 安芸国広島城所絵図(国立公文書館蔵)
竹の丸に結ばれていた(図8・正保年間)。

太田川は広島湾口に典型的なデルタを発達させている。広島城築城以降の築堤や干拓によって、デルタは次第に海岸へ拡がり、その動きは明治以降、現在も続いている。近世の干拓の主なものは、国泰寺新開・竹屋新開・船入新開・皆実新開などである。図9に見られるように広島はその大部分が、城下町建設以降の干拓事業によって生まれた人為的なデルタである。

広島の城下町は太田川のデルタにまたがっている地理的条件によって、江戸時代にほとんど連年大小の洪水に見舞われた。これが町民の生活を苦しめるとともに、藩の財政に大きな打撃を与えることにもなった。このため対策も考えられていたようである。

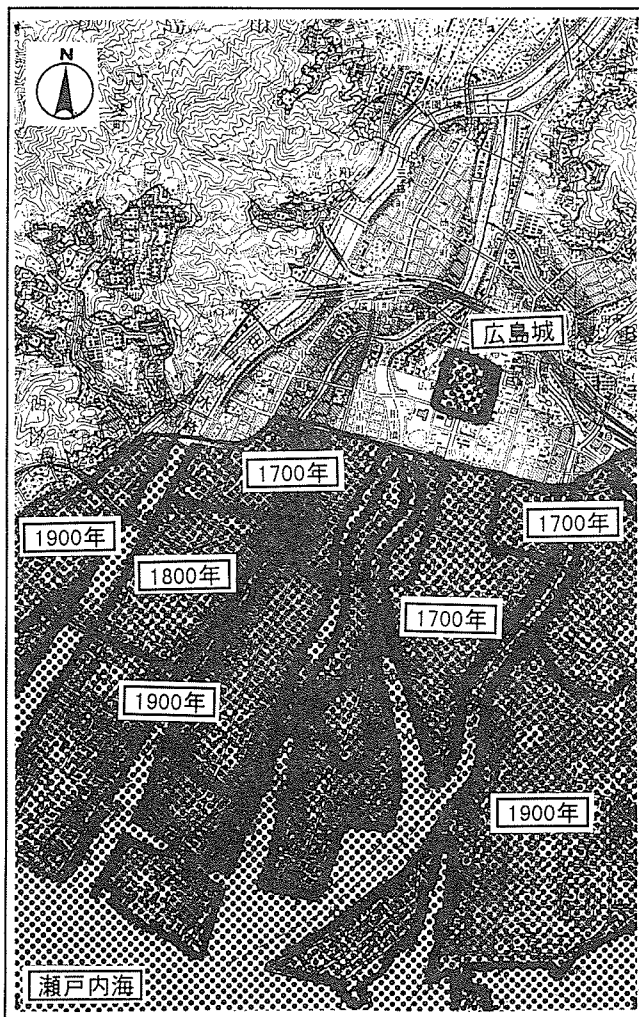


図9 広島埋め立て進行図

(国土地理院発行 S=1:50,000に加筆)

洪水はほとんど連年、台風の季節や雨期に起こって多大な被害を与えていた。元和6年(1620)夏の洪水の後の堤防の修築には特に注意が払われ、城側の堤の高さを対岸のものより相当に高くして、水越の構造とした。洪水の対策としては、出水時の藩士の受け持ち区域が承応3年(1654)に定められ、また元禄5年(1692)の『火事之定』には洪水防止のことも簡単に付記してあって、大水の際は普請奉行が足輕を召し連れて堤防を見回り、藩士は高100石につき空俵3俵・杭木3本ずつを出すことが規定されていた。また元文元年(1736)には材木場・元安橋・京橋の3ヶ所の尺木を整備して、正確な水位を測定するようにした。さらに寛政8年(1796)の大洪水の被害に省みて、翌9年に種々詳細な水難防止の規定が作られた。すなわち洪水の際は浦辺・島方よりも救助船を太田川の河口に出して、人・牛馬の救助にあたり、川沿いの船主も

救助船を用意すること、平常時より橋梁の上流に筏・木材などを係留しないこと、材木場に建てられた尺木による水位が1丈1尺に達すれば警戒を厳重にすることなどであって、藩の士卒と町人が協力して広島を水害から守ろうとしたことがうかがえる。

近世の初期には藩政の確立に伴い、大規模な治水工事が行われて、原野の開削とともに大河川の流域にも広く耕地が開かれた。また河口の干拓による新開の埋め立ても盛んに行われて、著しい耕地の拡大がみられた。これは大名権力に結集された政治力・経済力が、この時代の技術の進歩を利用して初めて成し遂げ得た積極的な人の力による自然制御を示すものといえるが、またそれだけに不断の管理を欠けば洪水や高潮による災害を受けやすい耕地が増大したこともあった。

太田川の三角州の干拓によって成立した広島城も、この時代多くの風水害や高潮の難に苦しめられた。1620～1867年の間に66回を数える風水害を、その種別と、被害の大きさから3種類の階級に分けたのが表2である。

表2 広島水害階級表¹¹⁾¹²⁾

	長雨洪水				暴風雨洪水				高潮洪水	合計
	A	B	C	計	A	B	C	計		
17世紀(1620～99)		3	10	13	1	2	7	10		23
18世紀(1700～99)	1	2	5	8	3	6	11	20	3	31
19世紀(1800～67)	2	1	3	6	5	2		5	1	12
計	3	6	18	27	7	10	18	35	4	66

凡例:田畑の損耗 A・10万石以上
B・1万石～10万石 C・1万石未満

すなわち17世紀に23回(3.5年に1回の割合)、18世紀に31回(3.2年に1回)、19世紀に12回(5.6年に1回)となっているが、18世紀にその頻度は最も大きく、特に台風による被害が多くかつ大きかったこと、また時代が下がるにつれて田畑の損耗が大きくなっていることが注目される。17世紀以降における新開地の拡大が、このような水害を誘発することとなったことが推定される。

5-7 松山城¹⁶⁾⁻¹⁸⁾

松山城は、加藤嘉明が築いた四国最大の城で、道後平野に位置する独立丘陵の勝山(標高132m)

を核とした城である。城地は西方眼下に、伊予灘を望み、南に重信・石手の2河川が流れる平野が開け、北東に高縄の山並みを背負っている。

加藤嘉明は豊臣秀吉の下で10万石の大名となり、伊予正木(松前)に封ぜられた。関ヶ原の戦功で、徳川家康から20万石に加増され、城を築くことを許された。嘉明は慶長7年(1602)、松

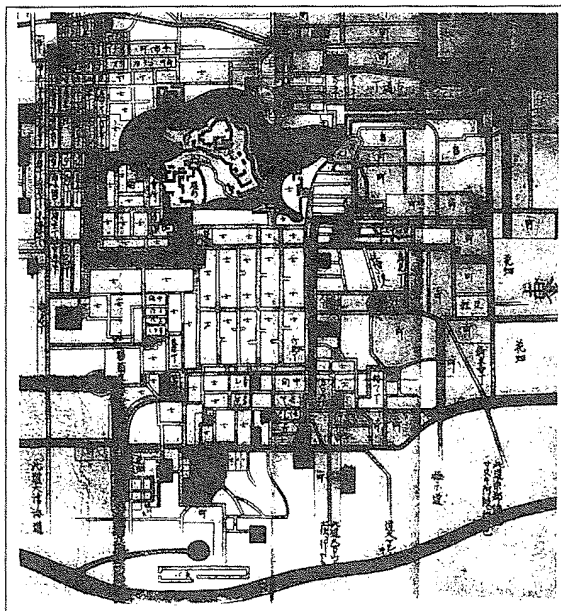


図10 松山城絵図(広島市立中央図書館蔵)

山築城に着手、延々26年かけて完成した(図10)。

城の構成は、勝山の頂部を本丸とし、西南麓中腹に二の丸を、西方平地部に三の丸を構える縄張である。これに北麓に北曲輪、東麓に東曲輪を配している。勝山の頂上部は元々2つの峰が並んでいたが、城地を広くするため、2峰を削平して中間の鞍部に盛土し、T字型プランの城郭を造成した。本丸北半分は東西150m×90m、南半分は80m×200mである。北半分に天守曲輪があり、8mの高石垣の基壇の上に建っている。

城下町は城の西から南にかけて営まれた。築城以前は、勝山の南麓を湯山川(現在の石手川)が流れ、一帯は低湿地で氾濫が絶えなかった。

「石手川の流路は足立重信改修以前は、岩堰より湯築城(道後公園)の傍を過ぎ、旧湯渡校付近を西流し、持田の中央を一貫し、玉川町辺りより二番町を流れて八ツ股榎(今の市役所)に出て、それより南堀端を南に流れて今の妙清寺辺りを過ぎ、吉田浜に注入したるが如し。」¹⁾とあるように、湯山川は現在の流路と違っていた。

加藤嘉明は城下町に建設に先立って、家臣足

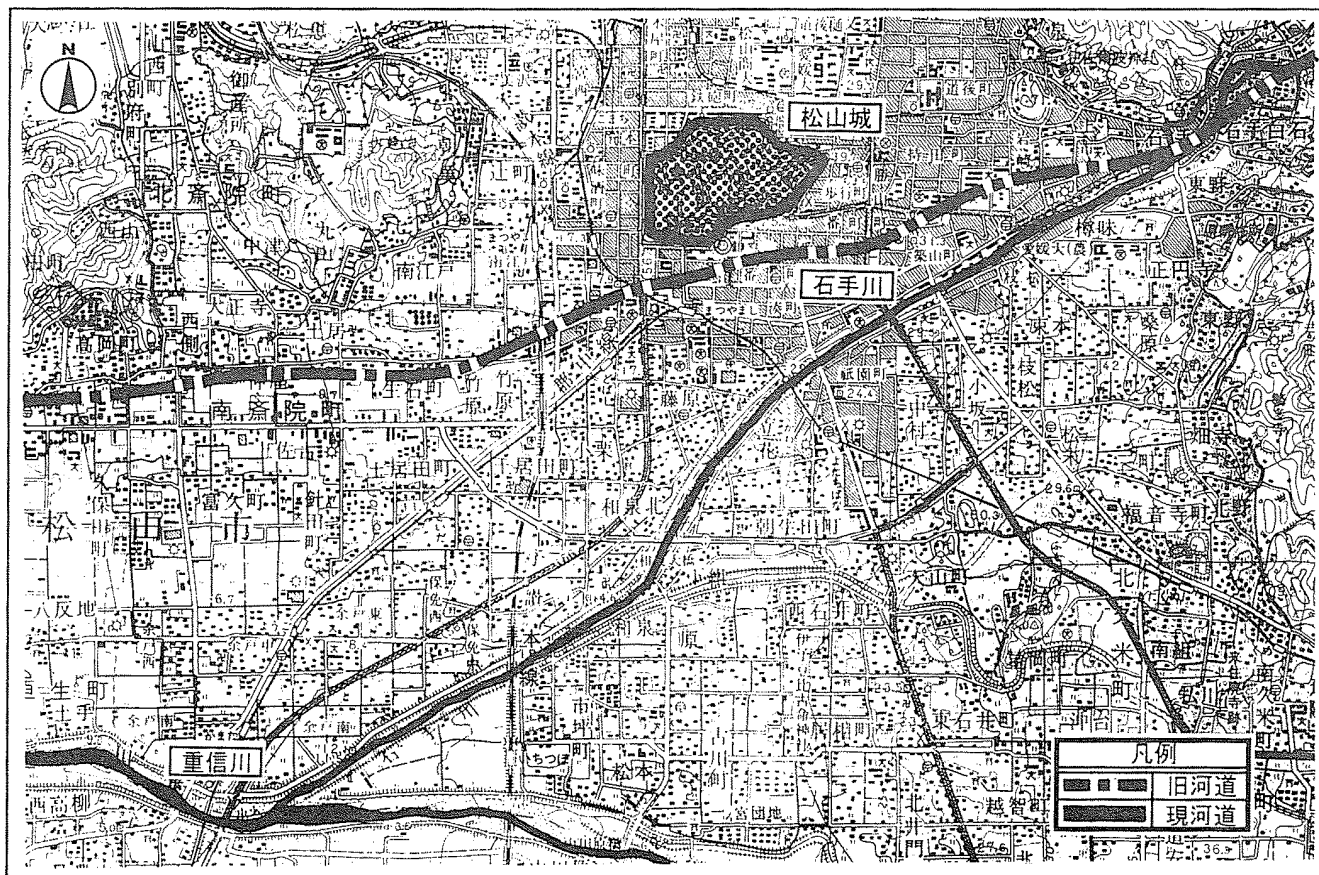


図11 松山推定河道変遷図(国土地理院発行 S=1:50,000)に加筆)

立重信の議を用い、慶長6年(1601)頃、彼に命じて石手川を改修させた。すなわち、石手村の岩石を削って流路を南に導いて、余土村市之坪で伊予川(重信川)に合流させ、石手寺上流から西南に流れる流路を開き、その兩岸に長い堤防を築いて川筋を固定した(図11)。また、旧河道を埋めて数百町歩の新田に開発した。これは城下町とその付近の平野を洪水の氾濫から守るため、河川流路を南方に付け替え、町割・治水・灌漑に力を注ぐとともに、新流路(現石手川)は南側防衛の外堀の役割を兼ねさせようとしたのであった。なお、伊予川は足立重信の治水工事によって改修されたので、その功績により重信川と呼ぶようになったと言われている。

その後、石手川の氾濫は度々あり、その被害も多かった。寛永12年(1635)に松平定行が15万石で封じられて以来、松平家が明治維新まで続いたが、この間特に延宝元年(1673)・享保6年(1721)の洪水は大災害をもたらした。享保8年藩主松平定英は大川文蔵を起用し、以降河川改修工事に取り組んだ。彼は石手川の氾濫の原因を土砂の流出・堆積により河床が上がることで、川幅が広すぎるなどによると考え、川幅を減じて水勢を一定にすることにより、水深を深くした。この結果、石出川の被害は軽減された。

6. 城と水辺空間との関わり合い考察

前述のように城と城下町と水辺空間との関わり合いについて事例研究を行った結果、分類整理すると、表3の通りである。

表3 各城と水辺空間との関わり合い表

事例 城郭名	① 防備強化	② 河道付替	③ 整備干拓	④ 形態変化
松本城	○			
上田城	○	○		
桑名城		○		○
福知山城	○		○	
福山城	○	○	○	
広島城	○		○	○
松山城	○	○	○	

以上から、築城時においては、より要害堅固にするために河道を変更させた事例や、積極的に土木工事を起こして、城と城下町の発展基盤を造ろうとしていたが、特に河川に対して水害に悩まされた結果、時代の経過とともに築城当初の防備重視の考えを捨て、河川改修や流路の付け替えをして、経済・安全を重視する考えへと変化してきた様子がうかがえる。

7. まとめ

城と城下町の建設・形成の過程における、水辺空間の取り扱い方に関して、当初の意義が時代の推移とともにどのように変わってきたかを調べ、次のようなことを検証した。

1. 建設当初、水辺空間は、城の防備面において特に重要視された。
2. その後、水害対策のため、河道の付け替えを行ったり、あるいは、城の形態を変化させ、次第に安全を重視するようになった。
3. 宅地不足や農業収益を増すため、水辺空間を積極的に整備・干拓を行った。
4. 城によっては、土木技術の発展により、水害対策に挑戦し、克服したものもあった。

【参考文献】

- 1) 土木学会編、『明治以前日本土木史』、岩波書店、1936年
- 2) 松本市役所、『松本市史』上巻、名著出版社、1973年
- 3) 学習研究社、『歴史群像・松本城』、碧水社、1995年
- 4) 上田市史編纂委員会、『上田市史』、信濃毎日新聞社、1974年
- 5) 上田市立博物館編、『上田城』、上田市立博物館、1974年
- 6) 近藤圭、『桑名市史』、桑名市教育委員会、1959年
- 7) 福知山市史編纂委員会、『福知山市史』、福知山市、1984年
- 8) 芦田完、『福知山市誌』、福知山市、1965年
- 9) 図書刊行会、『福山市史』、福山市、1983年
- 10) 村上正名、『福山の歴史』、歴史出版社、1978年
- 11) 広島市編、『新修・広島市史』、広島市、1959年
- 12) 広島市編、『概観・広島市史』、広島市、1955年
- 13) 広島市編、『広島市史』第1巻、広島市、1921年
- 14) 中国出版社、『広島城四百年』、1993年
- 15) 学習研究社、『歴史群像・広島城』、碧水社、1995年
- 16) 松山市史編纂委員会、『松山市誌』、松山市、1962年
- 17) 松沢巖、『伊予市談』、1915年
- 18) 松山城編纂委員会、『松山城』増補5版、松山市観光協会、1994年